

2011 年度雪氷学会功績賞を受賞して —雪氷学会のネットワーク活用を進めるために—

高知大学名誉教授 菊地 時夫

このたびは学会賞（功績賞）受賞の名誉に授かり、まことにありがとうございました。ご推薦をいただいた諸先生がたをはじめ、関係された皆様には大変感謝いたしております。

さて、受賞理由となりました、「学会のホームページ開設と運営によって学会の運営発展に果たした」ということについて少し書かせていただき、今後、学会がネットワークを活用して行くための希望のようなものを述べて、受賞の挨拶に代えようと思い、キーボードに向かっております。

学会の情報発信に関わるようになったことについては、私自身が雪氷学を研究しながら情報科学へと転身してしまったということが関係しております。高知大学という地理的には雪氷との縁が薄い大学に就職し、その中で新学科設置という問題が起こったとき、地方にいるための情報過疎を解決できるのではないかと、そのメンバーとして立候補してしまいました。

ちょうど、高知ではインターネット開通前夜という時で、宇宙開発事業団（当時）との共同研究でネットワークを利用した衛星データの活用を取り上げていたこともあり、新学科のホームページ上で気象衛星ひまわりの雲画像を公開するなど、調子に乗って手を広げている時期でもありました。

細かい経緯や自慢話は省略して振り返ってみますと、一時の勢いで仕事を引き受けることの難しさ恐ろしさに改めて冷や汗をかく思いです。その中で現時点での学会ホームページを中心とした情報化ということについて述べてみたいと思います。

それは、ホームページとそれを補足するメーリングリストの運用が、今や学術団体としての第3のメディアとして必須と考えられているということです。つまり、どのような会（社団法人であろうが任意団体であろうが）であっても会員を抱えて

いる以上はそのコミュニケーションに昔から必須と思われる「会誌」、次に「研究を進め、学術の振興に寄与する」と定款に謳う以上は必要であろう「英文学術誌」の発行の2つに加えて、迅速であらゆる人々に開かれたメディアとしての「インターネットでの情報発信」が取り上げられています。

日本雪氷学会は『雪氷』、『Bulletin of Glaciological Research』そして『日本雪氷学会ホームページ』という形で理事会の下に置かれた「編集委員会」、「BGR 編集委員会」そして「電子情報委員会」が担当しています。ところが、それぞれの「委員会」が何をどこまで作業するのかについてはかなり違っています。

つまり、「編集委員会」の仕事が記事を集めて印刷にまわすまでなのに対して、電子情報委員会は印刷に相当するサーバの運用までの仕事があるということです。これは、我々（雪氷学会）が他学会に先駆けてホームページ公開を行ったということにも関係していると思いますが、特長として記事集めから発行に至るまで「メーリングリスト」を活用していることが大きいかもしれません。

メールを利用することで最新ニュースをいち早く会員に知らせることができるだけでなく、一般会員からの記事集めの敷居を低くすることの効果もあるかと思います。とかくインターネット＝WWW（Web）と思われがちですが、Web は見てもらわなければ役に立ちません。また、どうしても「見るだけ」になってしまいがちです。メールは人によって差はあるものの誰もが必ず読むと思われ、また誰でもこれを使って情報発信ができるでしょう。

現在のところ、こうした「学会」の運営に必要な最低限の「印刷屋」の仕事に関するような基本的なところで、残念ながら満足できる業者は非常

に限られてしまいます。しかし、学会として電子情報発行の手順を確立することができれば、会員の皆様のご協力によって円滑な運用ができるのではないかと考えます。

「電子情報委員会」は出発してもなかなか歩みの遅い赤ん坊ですが、皆様のご協力をぜひお願いし、またサーバの運用だけでなく記事の「編集」という基本的な役割を自覚する上でも必要なことではないかと考え、あえてここに書かせていただきました。

最後になりますが、雪氷学会の益々の発展と会員の皆様方のご清祥を祈念し、受賞のお礼とご挨拶としたいと思います。大変ありがとうございました。

なお、菊地氏には病氣療養中の処、2012 年 1 月 14 日にご逝去されました。この原稿は体調の良いときを見計らって、早めにご覧いただきました。故人の学会への貢献に感謝し、御冥福をお祈りします。

編集委員長 石本敬志

功 績 賞 を 受 賞 し て

NPO 法人雪氷ネットワーク 理事 山田知充



過日「日本およびヒマラヤにおける雪氷災害と学会活動への貢献」に対して功績賞を贈呈すると連絡を受けましたが、当初は特に何か功績賞をいただくようなことをした自覚はなく、学会活動への貢献というのは、支部長として行った北海道支部の改革が評価されたのであろうか？と思っていました。

従来、北海道支部は年配の理事と若手の幹事とで運営されてきました。しかし、この体制では北大低温研の変革などによる時代の変化に対応できなくなっていました。そこで、幹事を廃し、支部の運営に多くの会員の知恵が生かせるように、任期を明確にして適宜交代で広い年齢層から理事にご就任願うこととし、理事が支部事業を分掌して、責任を持って実施する体制へと移行しました。支部の活動資金は支部機関誌「北海道の雪氷」にほとんどが消えてしまい、他の事業に廻す余裕のない状態だったので、これを HP に掲載することで財務状態を改善するなど、関係者の皆さんの理解と協力で、多くを変えてゆくことができました。

その過程で、雪氷災害が起こった時、マスコミや警察・消防など防災関係者から雪氷学会に對

し、災害の実態解説や防災方法、雪氷専門家としてのコメントなどを求められる機会に何度も出ました。これらの要請に適切に応えるためには、災害現場に出かけて専門家の目で実態を把握することが重要です。従来は北大低温研の雪害部門が担っていた役割を、雪氷学会道支部が担う必要が出てきたようでした。そこで、4 年前の初冬 (2007 年 11 月) に「雪氷災害調査チーム」の創設に踏み切りました。雪氷災害一般が対象ですが、ただ雪崩災害については、災害現場が雪崩研究者にはアクセス困難な山岳地帯が多いこと、雪崩跡が時間と共に急速に変化するので緊急出動を要することなどから、研究者と登山経験者 (山岳ガイドほか) からなる調査チームを予め組織しておいて、素早く出動できる体制としました。その結果として、入手困難な現場の良質なデータを得ることが可能となりました。

当日、受賞理由を伺い、上記支部活動が受賞の理由の一つになっていること、加えてヒマラヤにおける氷河湖研究に対しても評価していただいたことは、大変嬉しく、光栄に思う次第です。

私の研究生活を振り返りますと、専門分野を定